

中學後の

地域連携
地域交流

本校の地域連携・地域交流

富士吉田市立下吉田中学校

共に学び支えあう教育

～高校生ボランティアによる学習支援活動～ 近隣高等学校との連携

1 目的と経緯

- ・中学生の学力向上と学ぶ意識の向上を図る
- ・年齢の近い高校生による学習支援を受けることにより、学ぶ楽しさを深める
- ・高校生のインターンの一環として、将来の人生設計の一助とする
- ・十数年続く交流活動であるが、新型コロナウイルス感染症対策により中断していた。昨年度より交流を再開した

2 内 容

- ・例年、2月下旬に実施する学年末試験に向けた学習会に高校生がボランティアとして参加し、1年生と2年生に対し学習支援を行った
- ・高校側と日程調整を行い、予め高校生が来校する日を生徒に通知した
- ・日程については、感染症の流行なども考慮し柔軟に対応できるように配慮した
- ・生徒が疑問に思ったことを質問し、それについて高校生がアドバイスする形式をとった
- ・高校生は卒業を間近に控えた3年生が参加することになっている
- ・人選は高校が行い、本校出身以外の高校生が参加することもある
- ・昨年度は、10名の高校生が参加した
- ・学年ごと5名の高校生が生徒を支援した
- ・支援の方法や割り振りは、学年の教員が生徒の実態や要望に応じて決定した
- ・高校生に対しては、困ったことが起きたらすぐに教室で共に支援を行っている教員に遠慮なく相談するように伝えた

3 成果と課題

- ・年齢が近いこともあり、生徒から多くの質問が出され主体的な学習ができた
- ・試験前という時期もあり、多くの生徒が参加した
- ・質問の中には、学習法に関するものもあり生徒が興味をもって耳を傾けていた
- ・高校生の存在が身近な目標として生徒たちに良い刺激を与えていた
- ・教員志望の高校生も含まれており、将来の職業選択の一助となった
- ・限りある時間の中で全員に支援が届くことができない
- ・違う時期にも実施することができるか検討していく
- ・学習支援以外の場面でも生徒同士の交流が図れる機会を模索していく

小明見の神楽舞（獅子舞）交流会

富士吉田市立明見中学校

地域の伝統文化に触れる交流体験

全校での交流会

1. 伝統文化について

小明見神楽舞保存会に継承されている「こあすみのがくらまい（ししまい）」は、無形民俗文化財として、地域のお祭りなどで披露される大切な文化となっている。

宝暦12年（1762）に小明見地区の若者（丸組・下宿組）によって始められ、その後、文政10年（1827）に引廻しの神楽堂が両組若者によって造られ、今に受け継がれている。小明見浅間神社の4月の例大祭には、境内で舞を奉納し、神輿の地区内巡幸にその先導を務め、神幸の道筋と辻々の祈願所で潔めの舞を舞う。

昭和48年より無形民俗文化財と指定され、現在に至る。



2. 内容

- ① 神楽舞についての説明とこれまでの経緯を講話形式で聞く。活動の様子や、舞の内容などについても学習する。
- ② 演舞（こあすみのがくらまい）

3. 成果と課題

あまり鑑賞する機会がない地域の伝統文化を、短縮形ではあるが生で見られることが、生徒たちにとっては新鮮な学びの場となった。

地域伝統の良さや偉大さを知り、自分の地域を尊重する気持ちが表れた。



本校の地域連携・地域交流

富士吉田市立吉田中学校

部活動を通じた地域連携

～地域移行に伴う部活動指導員との連携、外部指導者との連携～

1. 目的と経緯

本校では現在、17の常設部と6の季節部による部活動を行っている。これまで、バスケットボール、ラグビー、スケート、吹奏楽、茶道などの各部で、地域の外部指導者を招き、専門的な知見を取り入れた活動を展開してきた。外部指導者には、市の「部活動スポーツ指導者派遣事業」や「講師派遣事業」として活動指導していただいた。

一方、R3年度から新設されたスポーツ庁「地域運動部活動推進事業」により、休日の部活動の段階的な地域移行、合理的で効率的な部活動を推進することになり、R5年度以降に運動部活動が地域へ移行するための取り組みが、本市でも行われてきた。

本校では、それまで外部指導者を務められてきた方から「部活動指導員」を依頼する運びとなり、R5年度はスケート部と吹奏楽部に1名ずつ市で任用していただいた。また、茶道部では市の講師派遣事業で講師を依頼、柔道ではボランティアでコーチを依頼するなど、部活動を通じた地域連携を図っている。



2. 内容

部活動指導を依頼している地域の外部指導者（R5年度）

	外部指導者の立場・任用形態など	所在地	指導時間見込
スケート部	部活動指導員（市会計年度任用職員）	市内	冬季 80 時間 + α
吹奏楽部	部活動指導員（市会計年度任用職員）	市内	年間約 160 時間
ラグビー部	外部指導員（市部活動スポーツ指導者派遣事業）	市内	4～8月約 60 時間
茶道部	講師（市講師派遣事業）	市内	年間約 10 回
柔道部	コーチ（ボランティア、小学校教諭）	市内	月 2 回程度 + 大会

3. 成果と課題

- ・顧問教師では指導が難しい活動や実技・実習において、専門的な指導者による指導は有効であると言える。生徒の学びが広がり、楽しさを感じている様子も見られた。
- ・国の提言にあるように、少子化の中でも将来にわたりスポーツに継続して親しむ機会を確保すると共に学校の働き方改革も目指していくという、現段階の動きができた。
- ・課題として、顧問教師と外部指導者との指導方法等の共通理解、持続的な指導者の確保と開拓、任用手続きや勤務実績処理の効率化などが挙げられる。



共通理解を深める中で、子ども達の9年間の成長を支援する
～富士小学校・富士見台中学校の小中連携～

I 目的と経緯

富士小学校との連携は、平成27年度よりスタートした。小中学校の教職員が知り合い、連携を図っていく中で、児童・生徒の9年間の指導に資することが目的である。この考えを中心に置き、内容については毎年見直す中で、この連携が確実な成果につながるように努めている。1年間の連携の内容は、次のとおり、大きく4つにわかれている。

1. 小中合同会議... 教務会3回、職員会議2回
2. 行事関係... 合唱交歓会、縦割り集会、体験入学2回（1回は部活動体験）
3. 学習... 『家庭学習の手引き』作成、自主学タイム（家庭学習）への取り組み
4. その他... あいさつ運動、引き渡し訓練、お互いの学校の授業参観、乗入授業、中学生による読み聞かせ、小学校運動会でソーラン節披露、学園祭招待等

II 本年度の実践 [一部を抽出] - その成果と課題 -

○小中合同職員会議 [4月7日(金)・8月17日(木)]

「小中9か年を貫く学級経営の柱」の確立を見据え、テーマ『めざす子ども像～そのために何をできるようにさせたいか』を設定して、小6と中3のゴールについて考え、小中で共有した。限られた時間の中でより充実した話し合いになるように、ICTを活用し、最初に「～ができる」という書き方で個人の考えを伝え、それを受け、「どこを大切にしていくなか」、「学級経営にどのようなことを入れていくなか」を話し合った。小中お互いの学校の学級経営について理解を深めることができたこと、また、「育てていきたい力」を共有する中で、小6から中1へ継続した指導につなげていくことができる話し合いになった。この点は、大きな成果である。現状では、小中合同教務会は年3回、合同職員会議は年2回の設定なので、話し合いは充実したものになっているが、振り返りまではできていないところが課題である。教務会がしっかり次年度へつなげていく視点を持つことが求められる。

○小中連携合唱交歓会 [10月17日(火) 富士見台中学校体育館]

富士山音楽祭の前に富士小の4年生から6年生、富士見台中の1年生から3年生が合唱を交換し合い、交流を深めた。小中合唱交歓会は、それぞれの学校での発表会とは違った学びがあると感じている。一生懸命歌う小学生に向ける中学生の温かい気持ち、「中学生ってすごいなあ」という小学生の素直な気持ち、また、中学1年生は昨年度まで関わってきた小学生に成長した姿を見せることができる喜び、小学4年生は中学3年生を見て、自分達が1年生だった時に面倒をみてくれた6年生に会えた懐かしさ、「こんなになるんだ」という気持ち等、この交歓会はとても意義のある取り組みになっている。また、それぞれの合唱を見合うことによってうまれる思いが、より良い合唱づくりにつながっている。確実に大きな成果をあげている。

2つの実践をあげたが、小中連携を継続してきた中で、「子ども理解の一貫性」「教育目標の一貫性」「学習指導の継続性」等の面での効果を実感している。今後、地域の人達との連携も深めながら、子ども達のより良い成長をみんなで支援していきたい。

① 家庭科「保育」における保育園訪問実習

3学年家庭科「保育」の学習として、学級ごと実際に保育園を訪問し、園児と話をして共に遊んだりする活動を通して、保育の体験活動を行った。コロナ禍前までは毎年行っていたが、今年度久しぶりに再会することができた。

園の子どもたちは、先生たちとは違うお兄さんお姉さんと思いきり遊ぶことができ、とても楽しんでいた。また、同園出身の生徒も多くいるため、先生方に成長の様子を直接見ていただくこともできた。

当日は園にいらっしゃった地域のお年寄りにも学園祭で発表したソーラン節を見ていただくことができ、生徒にとって大きな自信とすることができた。普段、家庭で小さい子どもと過ごしていない生徒も多く、はじめは戸惑った様子も見られたが、すぐに園児とうちとけ、共に笑顔で遊ぶ姿が印象的であった。



② 本校中庭での「ミニ交流会」の実施

保育園訪問に対するお礼として、園児が本校を訪問し、手作りのお守りや千羽鶴を届けてくれた。その際、短時間ではあったが中庭で交流会のようなものを行い、生徒は久しぶりに会った園児と笑顔で話すことができた。

いただいた千羽鶴は3年生の希望進路実現へのお守りとして廊下に飾らせていただいた。今回、園と双方向の交流を行うことができ大変ありがたかった。

③ ソーラン節への取り組みに関する交流（予定）

保育園訪問の際披露したソーラン節に園の先生方や園児が興味を持ってくださり、園で取り組むこととなったため、中学生に講師となって教えてもらいたい旨の連絡をいただいた。

3年生は受験に向けた取り組みがあるため、来年度への継続性も考え、2年生代表が園を訪問して、園児にソーラン節を教える活動を行っていく計画を立てている。

この取り組みをきっかけに、園関係の方に本校学園祭を見に来ていただいたり、逆に生徒が園の発表会を見に行ったりするような交流の深まりにつながればありがたいと感じている。また今後は、他の園との交流も図っていきたいと考えている。



令和5年度 地域連携・地域交流の実践

都留市立都留第二中学校

平和教育

『戦争体験者から平和の尊さを学ぶ』

(市の関係機関との連携)

学年集会 講師：都留市在住の方2名 (都留市長寿介護課の方々の協力)

1. 目的と経緯

- ・戦争体験者の方からの話を聴き、平和の尊さと今ある日常の有り難さについて感じ、平和に対しての意識を高める。
- ・本校出身であるジャーナリストの山本美香さんが亡くなって10年にあたる令和4年度に「平和への思い」を受け、都留二中生徒会が「平和宣言」として採択し、令和5年度の活動にも継続している。
- ・本校では「お役に立ち隊」という勇志の活動があり、地域の清掃活動やふれあい活動を行っている。昨年度、都留市長寿介護のサポートを受けて、地区の60～90歳で構成する「似為芭笑(いしばしょ)さなえ会」において、ふれあい活動の機会があった。その中で戦争を体験した方々との出会いがあり、是非とも戦争について生徒に考えてもらいたいとの思いから、平和についての講話を実現するに至った。



2. 内容

- ・大月空襲や戦争を経験した2人の講師より、スライド等を用いて講話を行った。1人は大月空襲を体験した際、当時、戦争によって大切な家族や友人を亡くすなど辛い経験について語られ、今ある平和の尊さ、有り難さについて実感を持ってもらいたいと訴えた。1人は戦時中、食糧難で大変ひもじい思いをした経験から、ものを大切にしなければならないと、生徒に切実に訴えかけた。生徒も真剣な様子でメモを取りながら話を聴く様子があった。
- ・講演後は生徒と一緒に給食を食べたり、お手玉で遊んだりなど、生徒との触れ合いを楽しんだ。

3. 成果と課題

- ・2人の講師の話により、生徒は「戦争の悲惨さ」「平和の大切さ」について、強く感じる事ができた。
- ・本校では、校外学習において平和ミュージアム体験や夏休みの吉田空襲展の参加等も絡めて平和教育に繋げていきたい。
- ・長寿介護課の方々のサポートを受けるなど、今後も地域の機関とも連携しながらさまざまな活動を行っていきたい。



本校の地域連携・地域交流

都留市立東桂中学校

第20回「まちづくり文化祭・東桂」への参加

1 目 的

- ・学園祭（桂鮎祭）で披露している『東中ソーラン（ソーラン節）』を，地域住民にも見ていただき，東中文化を感じてもらう。
- ・地域住民との交流を深め，地域に貢献する意識を高める。…“地域が誇る学校”
- ・「社会に開かれた教育課程」を通して，地域と連携・協働しながら目指すべき学校教育の実現を行う。

2 内 容

今年で20回目を迎える「まちづくり文化祭・東桂」では，地域住民がこぞって参加し，自分で学んだもの，また各種団体の日頃の成果を発表し，多くの人たちが，多様な文化に触れることにより，地域の連帯感を培い，誇れる郷土を目指して，豊かな活気ある協働のまちづくりを推進している。

これまで本校においても，合唱や楽器の演奏，『東中ソーラン』の披露等，様々な形態で参加してきた。コロナ禍の影響により，しばらく開催されない年もあったが，今年は，コロナ前の形態に戻りつつある。

そこで，本校では，2年生を中心とした有志（15名）による『東中ソーラン』の披露を行った。当日の発表は，1日目（11日）の午後，ステージ部門（体育館）にて，行った。

- | | |
|---------|---------------------------------------|
| (1) 日 時 | 令和5年11月11日（土）・12日（日） |
| (2) 会 場 | 東桂小学校 体育館・運動場 |
| (3) 主 催 | 東桂地域協働のまちづくり推進会
「まちづくり文化祭・東桂」実行委員会 |

3 成果と課題

- ・地域の方から「素晴らしかった」「感動した」等の声が寄せられた。
- ・週休日の開催であり，事前の練習時間の確保や部活動との兼ね合いが難しかった。
- ・今後も，地域との連携を図りながら，郷土愛の育成に努め，信頼される学校づくりを推進していくことが大切である。



道志村立道志中学校

テーマ「私のふるさと道志・15歳の村への提言」

1 目的・経緯

始まりは10年以上前に遡る、中学生の村の議会見学からスタートしました。実際の議会を見ることだけでも中学生には学習になりますが、当時の議員さん達の方から「中学生の意見も聞きたい」と言う声が上がりました。そこで、次年度は議員さん達が来校し中学生と車座になり、これからの村の行く末を考える座談会が催されました。その後、これらの活動が総合的な学習の一環として根付き、中学生が村の現状を考えながら、今後の村にはどういったことが必要なのか、自分達には何ができるのかを探求活動から提言していく会へと変化してきました。現在では、議員さんたちはもちろんのこと、村長さん、教育長さん、教育委員さん、村役場の全ての課長さん達をお招きして、中学3年生が探求活動の結果として、一人一人村への提言をする会「15歳の村への提言」をおこなうようになりました。

2 内容

中学校3年間の一貫した総合学習のテーマとして「ふるさと学習」が設定されています。1年時にはふるさとについて知り、2年時にはふるさとの現状や課題について考え、3年時には「15歳の提言」という最後の発表の場に向けて自分の具体的なテーマを設定し、調査・研究の成果を元にした自分の考えを、村の議会や行政に向けて一人一人発表していきます。その発表の後、それぞれの提言者に対して議員さん達などが質問したり、アドバイスしたりしてより良い提言につなげていきます。そして、提言を持ち帰った村当局からはその後、提言の実現化に向け検討していただくという流れになっています。

3 成果と課題

成果としてあげられるのは、中学生一人一人が真剣にふるさとのことを考え、ただ大人に何かしてもらおう要求をするのではなく、中学生である自分達に何ができるのかを自己に問うようになることです。また、村側としても、中学生の柔軟な発想による提言を受けることで、実際の行政の方針に生かしたり、中学生と協力して何かを成し遂げることができることです。例えば、昨年の提言の中でふるさと納税の御礼状の中に、中学生が地元のお勧めスポットを紹介したり、教育への支援のお礼を書くという提言が実現しました。実際にこの4月からその御礼状は使われていますが大変評判が良く、村役場への問い合わせもあったほどです。今年も体験型ふるさと納税の提言や、自転車の村を作ろう、川をもっとアピール、外国人を村に呼ぶための英語パンフレット、郷土料理を生かした村とご縁作りなど様々な提言がおこなわれました。課題としては、年々提言の質は上がってきてはいますが、他学年も含めた多くの教員で関わる大プロジェクトとなっており、時間の持ち方、フィールドワークの仕方等の改善を考えていかなければなりません。



地域とともにある学校を目指し、生徒の成長を育む

西桂町立西桂中学校

1 目的と経緯

学習指導要領の前文には、これからの学校には「社会に開かれた教育課程」の実現が重要となると記されている。さらに文科省では「地域に開かれた学校」から「地域とともにある学校」への転換を目指している。本校においても地域とともにある学校を目指し、教育課程を実施している。西桂町全体で中学生の教育をしている。

2 内容

①地域とともにある防災訓練

各地域に所属している消防団のご協力のもと地域ごとに防災訓練を実施する。具体的には避難、お年寄りの家の見回り、放水訓練、消火訓練、救助体験、コロナ以前は炊き出しも行っていた。防災訓練を通し、地域に貢献する意識を高めている。



②地域とともにある三ツ峠歩け歩け運動

強歩大会を町の行事の三ツ峠歩け歩け運動に代え、町民とともに参加している。三ツ峠だるま石までの往復のコースである。昨年は、西桂町新庁舎建設に使う木材伐採の見学を行い、本年度は植林体験をすることができた。



③地域とともにある道德教育・挨拶運動

西桂中学校は、道德教育研究指定校となっており、町をあげて道德教育をしている。町民と挨拶運動をしていた長い経緯もある。本年度の道德では三ツ峠八十八大師の前かけの製作を通し「郷土を愛する態度」、地域のゴミ問題を通し「自然愛護」、保護者の協力のもと「生命の大切さ」について学んだ。



他にも体育では西桂町にあるボルダリング[®]の体験を全校で実施していたり、地域に遺跡が発見された時は授業として見学に行ったり等授業の中での体験活動を重視している。



3 成果と課題

西桂町は、町に一校しかない西桂中学校を町全体で育てる体制がある。多くの情報が手に入り、多くの町民が協力をしてくれる。これは文部科学省が目指す、「地域とともにある学校」に他ならない。来年度は西桂中学校にも学校運営協議会が導入される。部活動の地域移行も含め、多くの課題に対応できることが期待される。

忍野中伝統のキャリア教育『職業講話』

～自らの生き方を主体的に創る進路指導をめざして地域を学び・地域の人に学ぶ～

1. 目的と経緯

- ・啓発的体験学習のひとつとして地域を学び、保護者や地域の人から学ぶ機会とする。
- ・主体的に学び、自分の将来や職業について考えるきっかけとする。
- ・今年度で27回目を迎える伝統行事である。



2. 内容

- ・いろんなジャンルの職業から15講座前後開設する。講義や実習（1時間半）
今年度の開設講座は、消防士、パティシエ、電車の運転手、看護師、介護福祉士、アナウンサー、新聞記者、医師、美容師、保育士、機械エンジニア、犬の訓練士、イラストレーター、エステティシャン
- ・講師は、「地域に学び、地域の人に学ぶ」を基本にするため、村内在住者、村出身者、近隣市町村在住者を基準に選出する。（PTA本会役員が講師を選出し依頼をする）
また、無償（ボランティア）でお願いします。
- ・全学年参加し、自分の興味のある講座を選択し受講する。保護者の参観も可能。

3. 成果と課題

- ・生徒が自分の進路について考えられるようになった。
- ・働くことを自分の問題としてとらえ、考えられるようになった。
- ・講義だけでなく体験活動もあり、全員が興味を持って集中して学習できている。
- ・地域の方々と学校の交流の場になっている。
- ・課題は、毎年講師の方々の準備が大変であると思われる。ありがたい気持ちと申し訳ない気持ちである。



充実したスポーツライフ

～スポーツへの多様な関わり方を育む～

山中湖ロードレース

1 目的と経緯

本校では、50年以上にわたって「山中湖一周校内マラソン大会」を実施していた。コロナ禍においては、中止していた。一方、村主催の「山中湖ロードレース」には、生徒が手伝いをしてきた経緯もある。そのような中で、生涯にわたるスポーツライフを築く一環とするため、地域行事との連携をすることとなった。

2 内容

(1) ランナーとして参加

一般ランナーとともに1週約14kmを走った。(参加費の6000円は村からの補助)

(2) 競技ボランティアとして参加

スタート時の整理、給水所、ゴール地点でのフィニッシュドリンク配布の3カ所にわかれて業務を担当した。

2・3年生は令和5年2月に、参加の内容を選択した。また、1年生は全員がボランティアとして参加した。

3 成果と課題

ランナーとして参加した生徒は、6000人のランナーとともに走った。リタイアもなく、全員が完走した。多くのランナーとふれ合ったことや、たくさんの方々の支えで大会が行われていることに気づき、感謝の気持ちを持てた。また、ボランティアで参加した生徒からは、「ランナーの方にありがとう！と言われ、爽やかな気持ちになった」等の感想を多くの生徒が持つことができた。スポーツに参加すること、スポーツを支えることの素晴らしさを味わう大変貴重な機会となった。今後は、この取り組みを関係諸機関と連携して、持続可能な取り組みにしていくことが課題である。



本校の地域連携・地域交流

富士河口湖町立河口湖北中学校

河口小・大石小 両小学校6年生との交流

☆北中オープンスクール

1. 目的

- ・小中連携事業の一環として、新入生説明会の前に、小学生に中学校生活の一端を紹介し、安心して中学校への進学を準備できる機会とする。
- ・中学生はリーダーを中心に行動し、北中の良さを小学生に伝えるための活動とする。



2. 内容



- ・本校は表現活動に力を入れており、その一端を見てもらおうと合唱発表会と抱き合わせで実施した。合唱は全4曲（学年合唱3曲、全校合唱1曲）を披露し、双方にとって良い発表会となった。
- ・各部、部長の生徒が引率して部活動見学を行った。
- ・小学生を4グループに分け、中学1・2年生の学級役員と座談会を行い、中学校生活について話をした。

3. 成果と課題

- ・小学生が中学生の活動を参観したり、実際に中学生から学習や生活面等日常の様子を聞いたりすることで、小学生の不安を取り除き中1ギャップの解消になった。
- ・中学生が主体的に運営したことで、自信をつけるだけでなく、頼れる先輩としての意識を高めることができた。
- ・地域の子どもを地域で育てるという視点から、小中で連絡を取り合い、さらに連携した活動を行うことが今後の課題である。



勝山中学校区 保小中合同引渡訓練

1 目的と経緯

- 実践的な場面を想定し、保小中合同の訓練を行うことで、より安全で確実な引き渡し方法について職員・保護者・児童・生徒一人ひとりが自分事として考える機会とする。
- 勝山中学校区の小中学校・保育所（勝山小・西浜小・富士豊茂小・勝山中・勝山保育所・足和田保育所・富士ヶ嶺保育所）において、同時に引渡訓練を行う。前年度に引き続いて今年で2回目となる。（保育所も同時に行うのは今回が初めて）

2 連携機関

富士山科学研究所 富士河口湖町教育センター 学校教育課
地域防災課 子育て支援課 勝山中学校区小中学校・保育所

3 内容

- 勝山中学校区において合同の引渡し訓練を行った。小中学校・保育所において同時に行うことで、実践的な訓練となった。当日は、富士山研、地域防災課、教育センター職員が学校での様子を観察・記録し、今後の検証に繋げた。また、防災アプリや行政無線による連絡を地域防災課で行った。
- 事前には富士山研が中心となり、学校、教育センター、地域防災課で検討し引き渡しマニュアルを作成した。デジタル行政無線については、学校教育課が使用方法についての確認を行った。また、災害時における報告表「小中学校→学校教育課・保育所→子育て支援課」の構築も行った。



4 成果と課題

- 確実に保護者に引き渡すことができ、手順も確認できた。
- 行政（学校教育課、地域防災課）への情報伝達を確認できた。
- 訓練に緊張感を持たせる工夫が必要である。
- 人数が少ない時の引渡し体制を想定しておく必要がある。

特別支援教育を通じた地域連携

1 目的と経緯

本校は全校生徒530名であり、南都留では最も大きい規模の学校である。特別支援教室は、知的・情緒・弱視の3クラスで本年度は、11名在籍している。通常学級の担任や学校だけでは限界があり、地域と連携できないか検討してきた。

2 内容

「問題行動の突破口は、特別支援教育にある」との学校長の考えと、今後特別支援学級の生徒が多く在籍していくことから、校内研の研究主題を「通常学級における多様な教育的ニーズの把握と合理的配慮の手立て」と設定し、学習を積み重ねた。また、校内委員会を情報交換の場ではなく、課題を持つ生徒の実態把握を行い、今後の対応を協議する場とし、組織的に取り組んだ。学校での対応が的確かどうか、ケース会議の場にふじざくら支援学校地域支援部の先生を招きアドバイスをいただいた。

適切な支援を行っていくためには、家庭との連携が欠かせない生徒も数多く存在することから、富士河口湖町子育て支援課や福祉課、SSWと協力して対応した。また、健康科学大学クリニックや障害福祉サービス事業所との連携もできた。

3 成果と課題

支援学校の先生からのアドバイスを他の生徒にも生かすことができた。また、これをきっかけに支援学校の先生に生徒の学校生活を見ていただき、今後の対応に役立てることができた。学校としても校内研で学んだことを参考に、特別な支援を要する生徒への対応が組織として実践できている。保護者対応についても子育て支援課と連携することができたので、学校と家庭が力を合わせ、子どもたちの支援にあたることができている。

課題として、来年度さらに8名の生徒が特別支援学級に入級予定である。今後、更に増加していく可能性があり、教職員だけで適切な対応は難しくなる。また、生徒を取り巻く環境がさらに複雑化してくる。学校以外の外部機関などとさらなる連携が必要になってくると考えられる。